

自治体と連携した ESD 実践の報告

公開講座「垂水市の将来改革と基本構想の作成」

生涯学習教育研究センター 小栗 有子

1. はじめに

「あなたの専門は何ですか」と初対面の方に問われて、返事に窮することがしばしばあった。ESD (イ・エス・ディ) と言っただけでは伝わらないし、だからといって、「持続可能な開発のための教育です」というと、語っている尻から右から左へ抜けていっているのがわかるからだ。挙句の果てには、「接続可能な教育」と間違えられることも一度や二度ではない。

そこで最近では、あれこれ難しいことは言わずに「地域をつくる教育」だとか、「(持続可能な) 地域づくりの教育」と言うようにしている。こう言うと意外と皆さん納得してくれる。ただし、そうは言っても、どのような地域をつくるのかという点については、やはり解説しておきたい。

こだわりの形容詞をつけて、「持続可能な地域」といった場合、「地域の環境保全と地域経済が両立し、かつ、そこで暮らす人々が、世代を超えて公正で豊かな生活文化を享受できる社会のこと」をさして用いている。ポイントは、地域の環境、経済、社会のバランスにある。そして、この「持続可能な地域」の実現を阻害している問題に取り組む教育を ESD と呼んでいる。

さて、このような説明で ESD のイメージを持っていたかどうか。いや、持てなくても無理はないと思うので、まずはこの報告を読んでいただきたい。公開講座「垂水市の将来改革と基本構想の作成」は、「これが ESD だ」といえるモデルを日本ばかりでなく、世界に対しても示していくことを視野におきながら、地域の再生に取り組むプロジェクトである。まだスタートしたばかりであるが、どのような目的や構想の下で実践しているのかを報告したい。

2. 垂水市との連携にかける思い

当時センター長であった神田嘉延教授と共に、垂水市長を正式に訪問したのは、昨年 2 月であった。訪問の目的は、生涯学習教育研究センターと連携することで、垂水市を舞台に「ESD (持続可能な開発のための教育) と地域づくり」

のモデル地域を形成していくことを提案することであった。

当センターの申し出は、地域づくりの核に ESD をおくことの提言であり、垂水市の将来展望として持続可能な地域を描いていくことにあった。また、具体的には、「垂水市の将来改革と基本構想の作成」をテーマに年 2 回公開講座を開講し、さらにセンターと垂水市が共催でシンポジウムを開催することを当面の計画として提示した。

この提案に対して、垂水市側からは、表 1 のとおり、垂水市の資源と現在の問題点についての報告を受けた。

表 1

垂水市の資源	現在の問題点
➤ 山 (高峠・猿ヶ城・高隈山系・刀剣山)	➤ 財政悪化 (人件費増加・公共事業減少・社会保障費増大)
➤ 川 (本城川)	➤ 広域合併からの離脱
➤ 平野 (農業; 野菜・果樹・養鶏・養豚)	➤ 基幹産業の衰退 (農業の不振・漁業の不振)
➤ 海 (水産業)	➤ 人口の減少 (超高齢化・医療費の増大)
➤ 温泉 (温泉水産業)	➤ 少子社会 (複式学級の増加・中学校/小学校の統廃合)

初会合で、垂水市側がどこまでこちらの意図を汲んでいたかは定かではないが、センターの申し出の背景には、ESD をただ抽象的に論じているだけでは一向に中身が見えてこない。ESD 実践の第一歩は、地域が実際に抱える持続可能ではない課題を学習に結びつけていくことにあるという考えがあった。垂水市の場合でいえば、市が示した身近で切羽詰った地域課題に取り組むことこそが、ESD 実践の内実になっていくと考えていた。

ESD とはもともと、国際的に解決が困難な問題を打開していくために提唱された概念である。世界が直面する環境破壊、南北格差、貧困、飢餓、紛争など人類共通の課題を

いかに克服していくか。問題の解決には、もちろん政治的手段や科学技術の活用が不可欠である。だが、何にも増してこれらの課題に取り組み、解決していきける人の育成が急務であることに世界は合意したのであった。

日本政府の提案により2002年国連総会で「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」が決議されたことで、ESDは世界が最優先課題として取り組む教育となった。だが、ESDが掲げる理念や目標が、あまりにも包括的で壮大であるため、逆にESDがどのような教育実践であるかを非常にわかりづらくしている。実際、ESDの取組は世界的に始まったばかりであるし、ESDの推進を世界に提唱した日本国内においてさえ、未だなにがESDなのかという議論がなされている状況にある。

この状況に対して、鹿児島から一石を投じたいという思いが、「ESDと地域づくり」のモデル地域形成への提案に通じている。表1に挙げる垂水市の問題点は、いうなれば、日本の農山漁村であれば誰もが共通に抱える農村・過疎の問題である。しかも、これらの問題は、相互に関連する構造的な問題であり、これらの問題を主題にしていかないかぎり、「持続可能な地域」の実現は農村では望めない、というのが私の立場である。

農村ばかりではない。持続可能な社会の実現を阻害する問題のうち、農村・過疎問題に加え、都市・過密問題が、日本における二大問題であると私は認識している。また、この二大問題は、特に経済成長が急速に進むアジア諸国に共通する課題として深刻さを増している。垂水市で取り組む「ESDと地域づくり」のモデル地域形成の試みは、このように日本、アジア、世界を見据えながら、特に農村・過疎問題を中心にESDを展開することで、持続可能な地域社会を創造していこうとする社会的実験である。

では、地域づくりの核にESDをおくとはどういうことか。また、そのことで、地域はどうかかわるのか。そのあたりについて、本年度を振り返りながらみておきたい。

3. とりくみの内容

(1) 垂水市側の対応と公開講座のねらい

垂水市は、初会合の後庁内で検討し、鹿児島大学との連携について、①専門的知識の活用による学問的なバックボーンにすること、②産学官共働のシンボリックな存在、③新たな産業育成の可能性を探る場、④生涯教育の新たな次元での融合、⑤第四次垂水市総合計画の基本構想の策

定、⑥職員の政策立案研修の場、として活用することを話し合ったとの報告を受けた。また、受け入れ態勢としては、平成17年度は、総務課と企画課が窓口となり、総合計画の策定がはじまる平成18年度は、企画課を担当課とし、全庁体制で取り組む必要性についても話し合ったという。

突然の申し出ではあったが、垂水市として前向きに検討いただいた。しかも、平成19年に第三次垂水市総合計画が完了することを踏まえて、次期総合計画の策定過程と鹿児島大学の公開講座をリンクさせていこうとする市側の姿勢は、予期していなかったことであったが、公開講座の趣旨からして最も望ましい展開方法である。公開講座を次期総合計画の策定とリンクさせることで、学習の目的がより一層明確になった。

学習の第一の目的は、垂水市民の望む10年後、20年後、さらには、50年後の垂水市の将来ビジョンを描くことである。少なくとも、次期総合計画の柱となる方向性を導き出すことを目標に掲げていく必要がある。第二の目的は、その将来ビジョンを見据えて、「今」何ができるのか、また、「これから」何をすべきかについて明らかにしていくことである。当然これらを明らかにするためには、垂水市の現状と抱えている課題、良さと可能性等について精査していく必要がある。そして、何よりも重要なことは、分野や業種、立場や年齢を超えて、垂水市全体として合意を形成していかなければいけないことである。そのためにも、学習の目標や内容に加え、方法が重要になってくる。

ただ、このように公開講座の位置づけは決まってきたとしても、お互い初めての試みである。したがって、今年度は試行錯誤の積み重ねであった。大学側としてもそうであったが、垂水市側も体制を整えるのにずいぶん苦勞されたと思う。縦割りを越えて全庁体制で望むのは簡単ではなからう。幸い昨年秋以降に、企画課の中に大学窓口として担当者を一名配置していただいたことで、大学と市の間のコミュニケーションが、その後はずいぶんスムーズになった。また、公開講座等の準備に当たっては、課を横断する実行委員会方式を途中から採用したことで、全庁への浸透が徐々にではあるが進んできたように感じている。いずれ垂水市の担当者にも詳しく報告していただきたいと思う。

(2) 平成17年度の取組の概要

本年度は、結局公開講座「垂水市の将来改革と基本構想の作成」を年3回開講し、「垂水を語りもんそ会」(シンポ

ジウム)を年1回開催することになった。概要は、表2と表3に記すとおりである。紙面の関係で、個々の取組を詳しく報告することができないので、まずは、各々のねらいに注目していただきたい。いずれも、先に挙げた学習の目的を踏まえて、分野や立場を超えて地域の課題を共有し、そこから共通の将来ビジョンを描いていくところにねらいが定まっている。どのようなプログラム構成で、実際に公開講座を展開したのかについては、第1回目の公開講座を例に挙げながら、要点に絞って次で紹介しておきたい。

表2 平成17年度鹿児島大学公開講座「垂水市の将来改革と基本構想の作成」

<p>第1回公開講座 サブテーマ「地域資源の再発見」 日時：平成17年6月24日(金)13:00～19:00、 6月25日(土)9:00～13:00 対象者：垂水市職員と地域リーダー(40名) ねらい：10年後、20年後、50年後、どのような垂水を子どもたちに残したいのか。また、そのために垂水における地域資源をどう活用していくのか。(外からみた)垂水の地域資源の問題提起を受けて、垂水の「今」を支える異業種・異分野のリーダーが集い、地域の課題を共有しながら、垂水市の将来展望と地域資源の活用のあり方を探っていく。 問題提起と講師： ①『垂水には海もある』大富 潤(鹿児島大学水産学部助教授) ②『垂水は宝の山』井倉洋二(鹿児島大学農学部付属演習林助教授) ③『垂水は人づくりの宝庫』神田嘉延(鹿児島大学教育学部教授) ④『世界の中の垂水』小栗有子(鹿児島大学生涯学習教育研究センター助教授)</p>
<p>第2回公開講座 サブテーマ「地域の暮らしの豊かさの設計」 日時：平成18年1月29日(日)9:00～18:00 対象者：垂水市職員と地域リーダー(40名) ねらい：暮らしの本当の豊かさとは何なのか。また、それをどのように地域で創っていくのか。普段なかなか顔を合わせる事のない、学校教育、社会教育、</p>

<p>地域福祉、高齢者ケアの関係者が一堂に会し、それぞれが現場で抱えている課題を共有しながら考えていく。 問題提起と講師： ①『地域福祉の展開—ここで何をすべきか』高橋信行(鹿児島国際大学福祉社会学部教授) ②『高齢者の健康・生きがい作り』徳田修司(鹿児島大学教育学部教授) ③『村づくりと公民館』神田嘉延(鹿児島大学教育学部教授) ④『子どもの発達と学校・地域の役割』狩野浩二(鹿児島大学教育学部助教授)</p>

<p>第3回公開講座 サブテーマ「垂水市の財政改革」 日時：平成18年3月22日(水)13:30～17:00 対象者：垂水市職員(40名) ねらい：国のかたちや国と地方の関係が大きく揺らぐ今日、垂水市は、今後自治体としてどのような姿を描いていくのか。自分たちの望む市のあり方を自由に討議し、また、そのために必要な財政基盤のあり方・つくり方についても展望を描いていく。 問題提起と講師： 『これからの市町村経営に必要な持続可能な財政の考え方』皆村武一(鹿児島大学法文学部教授)</p>

表3 第1回「垂水を語りもんそ会」(垂水を語ろう会)

<p>テーマ「自分たちの地域は、自分たちで守ろう！」 日時：平成17年12月18日(日)13:00～16:30 対象者：垂水市民(200名) 語りもんそ会の目指すもの： (1)台風14号で甚大な被害を受けた垂水市。その教訓を町づくりに今後どう生かしていくのか。防災まちづくりに向けた課題の共有と防災まちづくりの考え方・方向性の共有。 (2)垂水住民が、日頃感じている「こうすれば地域はもっとよくなるのに」を具体的な形にしていくエネルギーを生み出す場。次なる学習へつなげていく機会。 講演と講師： ①『台風14号から見えてきたこと』井村隆介(鹿児島大学理学部助教授)</p>
--

②『災害にも負けない先人の知恵』原口 泉（鹿児島大学生涯学習教育研究センター長）

公開談話会：

コーディネーター：小栗有子（鹿児島大学生涯学習教育研究センター助教授）、川端博海（垂水市商工会青年部長）

大学側：井村隆介（鹿児島大学理学部助教授）、原口泉（鹿児島大学生涯学習教育研究センター長）
垂水市側：仲濱計佐市（垂水市振興会長連絡協議会会長）、永吉信矢（下市木地区自主防災組織会長）

■感想文

■閉会の挨拶

プログラム1：アイスブレイク

公開講座の目的や、受講者の問題関心などをあらかじめ共有することを目的に、最初の1時間を使って、簡単なアクティビティーを実施した。主題（サブテーマ）に即して簡単な質問を出し、受講者一人ひとりが考えたことを付箋に記入してもらい、それを全体で共有する。各自が考えていることを共有することで、主題に対する認識が深まるだけでなく、主題に沿った自己紹介が手短にできるため、毎回最初に実施するようにしている。

第1回目は、サブテーマが「地域資源の再発見」であったため、垂水市の「自慢できること（よい点）」と「課題（悪い点）」について全体で共有した（写真と図1参照）。講座のねらいからすると、垂水の「良い点」こそが地域資源であるが、「悪い点」も発想の転換次第で地域資源に転じる。この「悪い点」を克服し、地域資源を生かす知恵をこれから学習していく、ということを確認した。

(3) 公開講座のプログラムとその要点

初めて実施した公開講座「垂水市の将来改革と基本構想の作成」（サブテーマ「地域資源の再発見」）のプログラムは表4のとおりである。この表に沿って、主なプログラムの要点を解説していく（表4の下線部）。

表4 第1回公開講座プログラム

6月24日（金）13：00～19：00

■主催者挨拶

■垂水市長挨拶

■アイスブレイク 垂水市の良い点・悪い点

■講師の問題提起

1. 「森は宝の山」 井倉洋二（農学部高隈演習林助教授）
2. 「垂水には海もある」 大富 潤（水産学部助教授）
3. 「垂水は人育ての宝庫」 神田嘉延（教育学部教授）
4. 「世界のなかの垂水」 小栗有子（生涯学習教育研究センター助教授）

■分科会

第1分科会「森は宝の山」

助言者：井倉洋二

第2分科会「垂水には海もある」

助言者：大富 潤

第3分科会「垂水は人育ての宝庫」

助言者：神田嘉延

第4分科会「世界のなかの垂水」

助言者：小栗有子

6月25日（土）9：00～13：00

■全体会



写真1：垂水市の良い点と悪い点について、各自がそれぞれマーカで紙に記入



写真2：一人一人が自己紹介を兼ねて、私の考える垂水の良い点、悪い点を発表



写真3：発表の傍ら、記入した紙を模造紙に分類しながら貼り付けていく

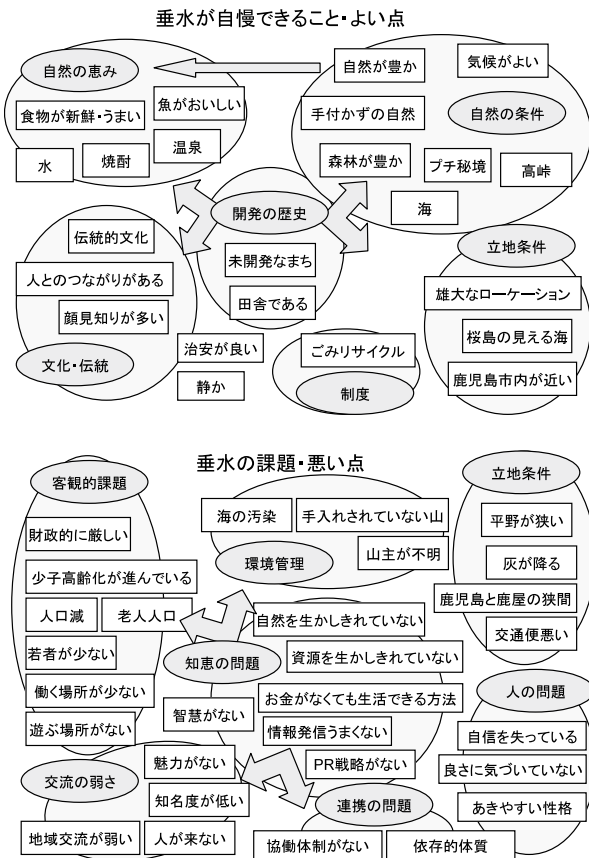


図1：最後は、垂水の「良い点」と「悪い点」のそれぞれについて内容を確認（公開講座報告書より抜粋）

プログラム2：講師の問題提起

続いて、表4のとおり4名の講師より30分ずつ問題提起があった。

この公開講座の中で、講師の問題提起は重要な位置を占

める。なぜなら、その提起内容によって、その後の分科会や全体会が方向づけられていくことになるからだ。特に、「持続可能な地域」を視野に入れて将来改革や基本構想を考えていく場合、その問題提起によって、どこまで持続可能性にかかわる地域の本質的課題を明るみにしていけるのか。また、そこからどのような展望を指し示せるのかが問われてくる。さらに、どれだけ受講者の現場感覚に合致した問題提起ができるのかも重要なポイントである。

公開講座の学習目的に到達するためには、全体のテーマ（サブテーマ）設定も含めて、事前に講師との打ち合わせを念入りにすることが重要である。その前提として、まず趣旨に賛同いただくことや、継続的にかかわっていただける方を講師として選定することが必要であり、公開講座を実施するうえで、一番苦勞する部分である。第1回目の講師は、垂水市をすでにフィールドに教育や研究をしている教員を中心に組織した。

プログラム3：分科会

講師の問題提起の後は、10人前後のグループを編成して、問題提起ごとの分科会へ移行する。2時間程度たっぷり時間をとり、講師が提起した問題を手がかりに、受講者が感じたことや考えたことなどを自由に意見交換する時間である。主体は受講者であって、講師は助言者として臨む。本音で語り合えるように、進行は分科会ごとに決めてもらっている。

分科会の目的は、受講者自らが、提起された問題を他の受講者と論じることで、問題を多面的に捉え、課題を明確にしなが、何が重要で、今後どの方向に進むべきかについて共有していくことにある。分科会は、公開講座のなかでも、自らの経験や関心にひきつけて認識を深めていける、受講者にとって一番深い学びの時間になっている。



写真：分科会の一場面

プログラム4：全体会

全体会は、各分科会で話し合った内容を報告しあう場である。また、同時に、最初に確認した公開講座のねらい（サブテーマ）に対して、何が共有できて、何ができなかったのか等について確認する場である。そして、この全体会でさらに重要な点は、今回の公開講座を次の学習や課題研究にどうつなげていくのかを確認することである。

少なくとも大学側としては、世界を視野に「ESDと地域づくり」のモデル地域を形成していくことを念頭においてスタートさせた公開講座である。垂水市が、今後とも継続して、ESDを核にしながらか持続可能な地域づくりに取り組めるよう、道筋を示しておく責任がある。そのためにも、次につなげていける具体的な地域づくり活動の目標と内容（各論）を講座の中から掘り起こし、確認しておくことが大切になる。地域づくり活動の各論が見えてさえいれば、その推進を妨げる課題について、一つ一つ学習につなげて取り組んでいくことで、「地域づくりの核にESDをおく」実践を積み上げていけると考えるからだ。

ただ、そうはいつでも、やはりESDの本旨は、持続可能な地域社会の実現を阻害する課題の見極めと、それを解決していくための道筋を立てていける人の育成にあると考えている。つまり、「持続可能な地域」の実現に必要な目標設定や、そこに向けて具体的な活動を生み出していける人の育成に、ESDが取り組むべき課題がある。そういう意味において、本年度開講したいずれの公開講座も、このESDの本旨に基づき、垂水市の地域課題を掘り下げ、持続可能な垂水地域の実現に向けた目標設定と、そのための各論を導いていく学習過程であったといえる。

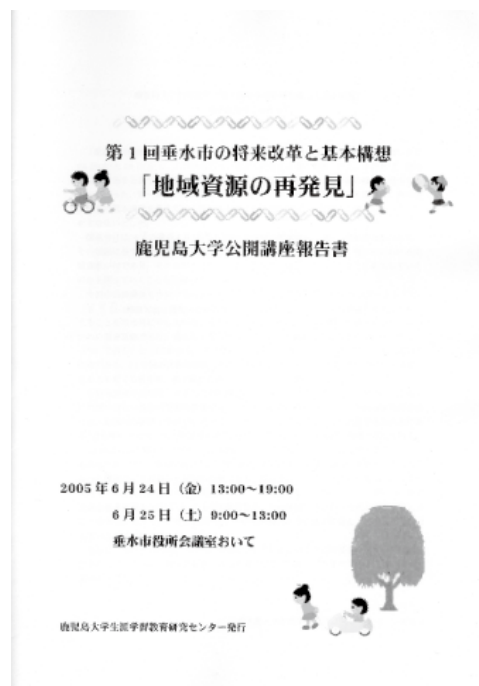
本年度の公開講座を通して、具体的な課題の共有と共に、今後の可能性や方向性について確認することができた。また、昨年12月に実施した語りもんそ会（シンポジウム）とあわせて、次につなげていく各論をいくつか選定し、次年度以降に展開する見通しまでつけることができた。このことについては、また最後に触れておきたい。



写真：全体会の一場面

公開講座実施後の報告

公開講座は、毎回受講生が40名程度で時間も限られている。公開講座の中で議論しつくせなかったことや、消化できなかったことは当然でてくる。そして、なによりも垂水市民全体から比べれば、受講できるのはごく一部という制約は、いかんともしがたい。そこで、学習した内容を受講した人も受講しなかった人も共有できるように、公開講座終了後に報告書を作成し、市にお返ししている。



第1回公開講座の報告書：講座で提起された問題、議論した内容、明らかになった課題などを収録した50頁程度の冊子に仕上がった。

また、垂水市のほうでも、たるみず市報や市のホームページを用いて、公開講座の取り組み状況を毎回市民に伝えている。大学だけでは到底及ぶことのできない全市民に対して、市のもつ媒体を通じて、情報が広く発信されている。



平成17年「市報たるみず8月号」に第1回公開講座の報告記事が掲載された。

4. とりくみの特徴と今後の展開

(1) 「オーダーメイド型」公開講座の意図

本公開講座の特徴は、垂水市という一つの自治体と組んで、継続的に公開講座を企画運営している点にある。自治体と組むとは、具体的なことを言えば、公開講座を実施するにあたり、大学側は、公開講座の内容を企画し、講師を組織し、当日の講座運営を行い、最後に報告書を作成し、自治体に返す。一方、自治体側は、要望を大学に伝え、参加する受講者を集め、会場を準備し、公開講座の費用を負担する。簡単に言えば、以上のような役割分担を大学側と自治体側で担う公開講座だといえる。

そして、このような連携スタイルは、大学の公開講座としてはまだ珍しいといえるであろう。その新規性は、あら

かじめ提供する講座内容が決まっているのではなく、むしろその逆で、地域のニーズや課題に細やかに対応する講座メニューを、その時々々の要請に応じて大学側（生涯学習教育研究センター）が用意する点にあると思われる。いわば、「オーダーメイド型」公開講座と呼べるかもしれない。そして、この準備にあたっては、クライアントである自治体側と何度も打ち合わせをしながら講座の内容を固めていくことになる。

このように手間のかかる公開講座にわざわざ取り組んでいる理由は、地域が抱えている課題を学習課題につなげ、学習を組織していけるよう支援していくことが大切だと考えているからだ。そして、その様なかわりの中に、「持続可能な地域づくり」に取り組もうとする自治体を教育面から支える、大学としての役割があるように感じている。教育面をここであえて強調するのは、生涯学習教育研究センターが、生涯教育の側面から地域に貢献する使命を担っているからである。つまり、大学として、科学技術面とは異なる、教育面からの貢献のあり方を今模索しているところである。

私が、大学の役割をこのように考える背景には、現場のプロは現場の方々である、という意識がある。つまり、課題に直面するのも、解決策を選び取るのも、また、実行していくのも彼らである。その彼らが、解決すべき課題を仲間と共有し、またそれをどうすれば解決できるのか目標と手順を共有し、協働して課題解決に取り組んでいけることが何よりも大切なことである。ところが、その道筋がつけられていないために、地域が本来もてる力を発揮できない状況が、多々あるように感じている。だからこそ、そこに道筋をつけていく支援を、大学として担っていくべきではないかと考えている。実際、学術の府である大学だからこそ、そのことが担えるという感触を得ている。

(2) 「問題提起型」公開講座の意図

本年度の公開講座の試みとして、意識的に取り入れたのが「問題提起型」公開講座であった。この方式のエッセンスは、2.の(3)「公開講座のプログラムとその要点」のなかで解説したつもりである。実はこの方式、垂水市で実施する以前に、屋久町と溝辺町（現霧島市）で取り組んでいる。私が赴任した翌年に、前神田嘉延センター長の下で、初めて「オーダーメイド型」公開講座を手がけた際に、大学側が一方向的に講義をするのではなく、受講者が主体的に参加

できる学びの空間をつくることを計画した。その過程で、「講師が問題提起をして、それに基づいて受講者が小グループに分かれて本音を語る」という分科会方式を取り入れた「問題提起型」公開講座が誕生することになった。

初めて導入した屋久町では、職員研修というかたちで、一方、溝辺町では、竹子地区の区民対象に、いずれも持続可能な地域産業と地域づくりをテーマに50名前後が受講した。受講者の反応として特に評価が高かった点は、地域の課題について受講者同士で本音を語り合えたことであった。普段顔を合わせていても、地域が抱える課題を本音で語ることはそうあるものではない。ましてや部署や立場を超えてとなると、その機会はますます乏しくなる。仲間（同僚）とのコミュニケーション不足は慢性的な問題になっているが、だが、本当に足りないことは「場の設定（機会）」であると感じた。

「持続可能な地域」を見据えた場合、分野や立場を超えたコミュニケーションが、地域課題の発見や、解決策のヒント、無から有を創造していくエネルギーを生み出すために欠かせないものである。そして、「問題提起型」公開講座という形式で大学が間に入り込むことで、その対話の場を意識的に作りだせることがわかってきた。本年度意図的にそうしてきたように、まったく畑違いの方々を集まってもらうことや、共通の課題・共通の目標について考えてもらうことは、大学が間に入っているからこそできることのように感じている。また、分科会のなかに大学教員が加わることで、対話の内容をより深いものにしていける利点も明らかになってきている。

ただ、「問題提起型」公開講座の難しさは、大学教員に求められる問題提起の適切さとそのコーディネート力にあると感じている。持続可能な地域社会を見据えた場合に、地域にとっての本質的な課題がどこにあり、その解決の方向性として何が考えられるのか。適切な問題提起と、取組のヒントとなる他の実践事例を紹介することができれば、受講者自らが、解決すべき課題を見出し、またそれに対する答えを探求していくきっかけを作り出していける。このように「問題提起型」公開講座は、受講者のみならず、大学教員にとっても「持続可能な地域」と真正面から向き合わざるを得ない講座になっている。今後は、「持続可能な地域をつくる」ことを中心課題におきながら、学際的な共同研究へと発展させていきたいと考えている。

(3) 次なる課題は担い手養成

次年度に向けて、すでに具体的に決まっている公開講座が三つある。一つは、「錦江湾を使った町おこし」、二つ目が、「地域防災マップをつくろう」、そして最後が、「地域に自然学校をつくろう」である。これらの特徴は、いずれもが、本年度に実施した公開講座と語りもんそ会のなかから導き出すことのできた「地域づくり活動の具体的な目標と活動」であることだ。つまり、講師の問題提起を受講者と議論するなかで得られた方向性を具体化していくための公開講座である。

そして、この三つに共通する今後の課題は、その活動を実際に展開していける担い手をいかに地域の中から養成していけるかにある。したがって、次年度の公開講座は、活動の担い手になっていける人の交流・組織づくりにまずは主眼をおいて、企画運営していきたいと考えている。また、公開講座の企画運営にあたっては、実際に問題提起をいただいた教員の方に中心的な役割を担っていただくことになる。現在、生涯学習教育研究センターを中心に、次年度に実施する公開講座の目的、内容、方法、実施時期等について協議を始めている。新たな試みとして、フィールド実習や宿泊学習を取り入れた講座を検討中である。

以下に、ごく簡単に内容の紹介をしておきたい。

①「**錦江湾を使った町おこし**」：垂水市は、35キロの海岸を有し、世界に類を見ない貴重な海洋資源にも恵まれている。にもかかわらず、漁業の90%以上までが養殖業。もっと天然資源を今後の地域づくりに生かしていけないか。そのためにもまず、「海を暮らしの中へ」、さらに「海を観光へ」つなげていくことが必要である。→このような問題提起を受けて、実際に、どのように「海を暮らしの中へ」、「海を観光へ」つなげていくのか、その道筋をつけていくことが次なる学習の課題である。

②「**地域防災マップをつくろう**」：台風のたびに災害に見舞われる垂水市。果たして過去の災害は教訓として生かされてきたのか。垂水市の地質・地形からして、災害が起こるのは当たり前。そのためにも「災害を知る」「地域を知る」「知識をいかす」ことが大切である。→このような問題提起を受けて、実際に「災害を知る」「地域を知る」「知識をいかす」場を作っていくことが今後の課題。手始めとして、地域防災マップづくりのノウハウから次の展開につなげていく可能性を探る。

③「**地域に自然学校をつくろう**」：垂水市には、鹿児島大

学農学部附属演習林がある。これは地域の貴重な資源である。これを今後どういかしていくか。演習林ではこれまで森林の教育的機能を生かした環境教育に取り組んできた。演習林が立地する大野小中学校の閉校にあたり、ここを拠点に大学と連携した自然学校を作っていないか。→このような問題提起を受けて、どのような自然学校をどのような組織形態でつくるのか。そのことを1年かけて学習していくことになった。

5. おわりに

以上、本年度の取組について、ざっと振り返ってみた。昨年2月に初めて垂水市長を訪れた時には、ESDという言葉を知る者も使う者もゼロに等しかった。それが今年一年の取組を経て、ESDに理解を示す人や、たとえESDという言葉は意識していなくても、垂水市の持続可能な地域ビジョンがどのようなもので、また、現在の地域課題が何であり、その克服のために何をしなければいけないかという問いに、汗をかいて取り組もうとする人たちが現れてきた。いや、正確に言うと、そういう思いを抱いていた人がESDに触れることで、垂水の未来を語り始めるきっかけを得たとみたほうがよいであろう。

そういう意味でこの一年は、垂水市にとってみれば、今後の将来構想としてESDを核におく地域づくりを目指すのか否かを、主体的に選び取るための時間だったといえるのかもしれない。今後垂水市で「持続可能な地域づくり」を進めていこうとすれば、必ず問われることになると思われる問題が、「持続可能な」が付かない「地域づくり」といったい何がどう違うのかということである。したがって、ESDの真価が問われるのは、正にこれからだといえるだろう。

一方で、これまで大学側のバックアップは、生涯学習教育研究センターが中心であったが、ここに来て、垂水市との包括協定といった全学体制で取り組む機運も見せ始めている。大学が自治体と組むことで、どこまで持続可能な地域モデルを具現化していけるのか。これからも試行錯誤を重ねてゆきたい。